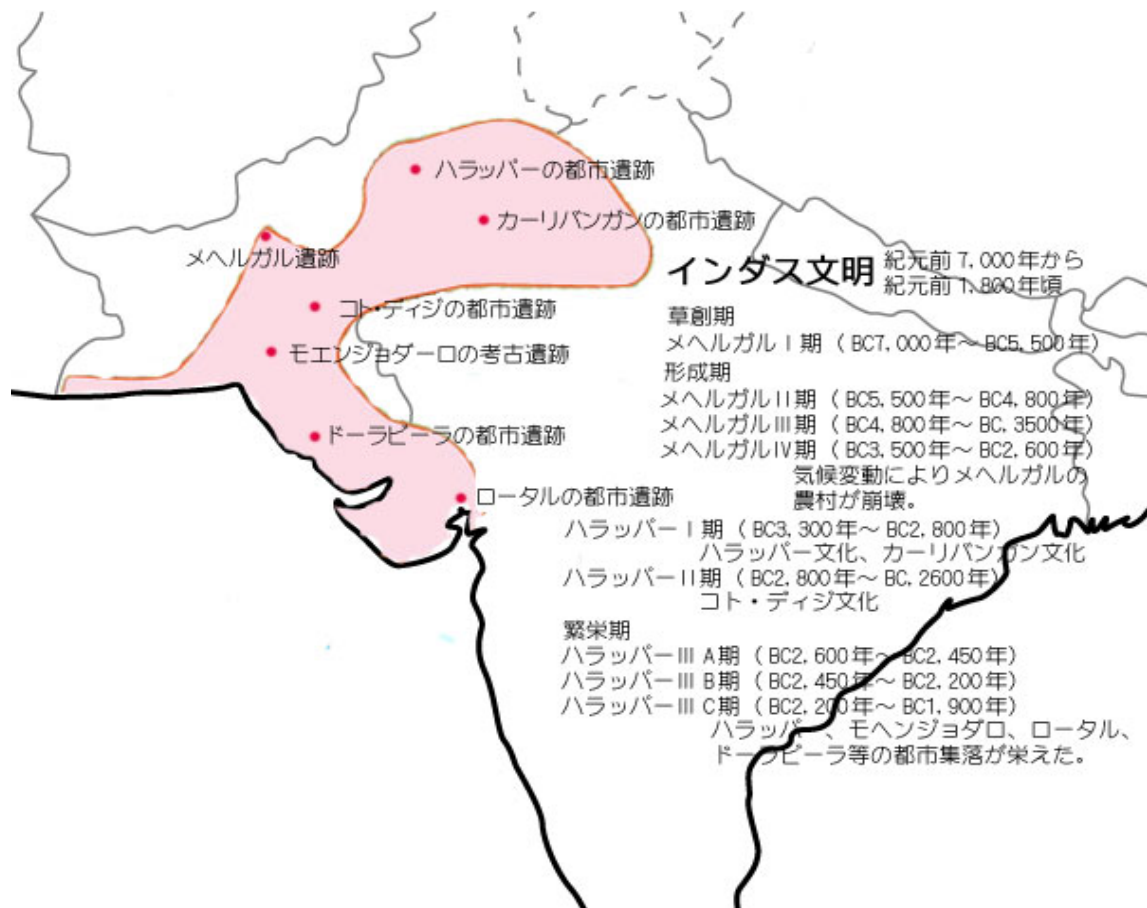


仏教伝来の経路

隠された古代史を探索する会

主幹 雑賀弘行

仏教は今から 2,500 年程前に、釈迦によって説かれた宗教。インド哲学から生まれてきた。インドを語るには、まずはインダス文明から。紀元前 7,000 年頃からで、日本では縄文時代前期に当り、縄文人は狩猟採集生活を送っていた。インドのインダス川流域は、現在の乾燥地帯ではなく、穀倉地帯でした。農作技術がメソポタミアから伝授され、農作物の集落ができ、新石器時代から脱皮して農作文化が芽生えました。その後、草創期に栄えたメヘルガル地方は、気候変動により乾燥地帯になり、インドの内陸部に拠点を移し紀元前 1,800 年頃には、インドパンシャープ州やウッタール・プラデーシュ州に移動していった。



インダス川流域で農作を行っていた民は、紀元前 1,300 年頃からガンジス川流域に移住し、先住民 (Y 染色体のパプログループ H) として生活をしていった。そこに、アンドロノヴォ文化の影響を受けたバクトリアから青銅器を持ち込んだ。これらの人はアーリア人 (Y 染色体のパプログループ R1a) の遊牧民で、先住民から農耕を学んだが、地味的には優位にたち、カースト制度 (階級制) を導入。神々への賛歌「ヴェーダ」を聖典として、祭事を行う最高位、バラモンについた。現在のヒンズー教の元、バラモン教です。カースト制度は、生まれ

て定められた階級は一生つきまとい、生涯の行いによって、生まれ変わったときに階級が変わる。その思想を輪廻転生といった。この思想は仏教にも受け継がれ、六道輪廻の宿命観に受け継がれている。六道とは、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天上道です。



紀元前 700 年頃には、バクトリアからやって来たアーリア人とインダス文明を支えた先住民との混血が普通になり、元々遊牧民であったアーリア人によって、商品の売買が行われるようになって、市場経済が生まれ、その中で自由社会も芽生えてきた。そして、この地域に合議制による族長が生まれ、紀元前 600 年頃には十六大国となっていった。その中の一国、コーサラ国で釈迦族の王子として生まれる。釈迦族は、コーサラ国の支配下にあったが、専制王を持たず有力者の集会で選出された首長が政治を行う制度、サンガを採用していた。釈

迦の父は、カースト制度では戦士・王族階級（クシャトリヤ）に相当していた。釈迦はアーリア人出身だったのです。釈迦はブッダガヤで悟りの境地になり、仏陀となり仏教の開祖となった。その悟りとは、苦の輪廻から解脱（煩惱に縛られていることからの解放、迷いの世界、輪廻などの苦を脱して自由の境地に到達すること）することを目指し、原因と結果の理解し、諸々の現象が縁起する。即ち、「無または空」の境地になること。このようにインドでは、バラモン教の反発から、仏教だけでなくジャイナ教のように多くの宗教や思想が生まれました。仏教もバラモンの支配によく思っていなかった戦士・王族階級（クシャトリヤ）の指示を得ていく。その中で、釈迦が身を寄せたマガダ国は、カースト制度の身分制度が緩く、他のアーリア部族から軽蔑されていた。そんなマガダ国の王、ビンビサーラ王は釈迦に帰依する。

釈迦が最初に仏法の講義をしたのは、カーシー国のサールナート。カーシー国もマガダ国の勢力範囲に入っていた。その後、西はクル国や東はアング国と各諸国に仏教の伝道に。そして、80 才を超えた頃、マッラ国のクシナガラに出向いて、弟子の鍛冶屋の純陀に会い、キノコ料理をご馳走になった。そのキノコによって腹痛から死亡した。釈迦は、マッラ国のマッラ族によって火葬され、ラマバール茶毘塚に。その後、釈迦のお骨は 8 等分され、釈迦族ではカピラ城の近く、ピプラワの仏塔に収められた。



釈迦の入滅後、アレクサンドロス大王がペルシア帝国を滅ぼしたことにより、マガダ国はインド全土を掌握した。アレクサンドロス大王が遠征中に亡くなった紀元前 323 年の翌年に、マガダ国のチャンドラグプタ王がマウリヤ朝を興した。仏教に貢献したアショーカ王の祖父です。そして、アショーカ王の時代にマウリヤ朝は全盛期を迎え、仏教もアショーカ王の支

援を得て、発展していく。紀元前 265 年にアショーカ王は、インドの南部にあったカリンガ国との戦争で多くの犠牲者を出しながらも勝利し、インドを統一した。そのアショーカ王は、この戦争での犠牲者を惜しみ、仏教を擁護することになる。アショーカ王は、カリンガ戦争終了後、征服した土地に円柱を立て、或いは大きな岩に碑文を掘って、民に従うよう法勅を示した。それが、インドからパキスタン、アフガニスタンまで広がっていった。その碑文には、仏法の事柄も書かれていた。また、8 カ所に分かれていたお骨を再分割して、壺に入れた仏舎利を収納する仏塔を各地に建造した。代表的なのが、サールナートのサーンチー第 1 塔、第 2 塔、第 3 塔です。インドでは円塔が主ですが、仏舎利を納める仏塔として、仏教が広がっていく地域によって様相が変わり、仏教が伝わった日本では、五重塔を代表とする多重塔に変化しました。また、仏教が広がっていく過程で、釈迦の舎利が底をつき、代わりに高僧の仏舎利を代用したようです。



ガンダーラの仏塔

アショーカ王が統治していたマウリヤ朝では、ガンダーラにも仏塔を建造していた。しかし、アショーカ王が亡くなり、マウリヤ朝が衰退していくとアレクサンドロス大王以後もバクトリアに残っていたギリシア人が建国したグレコ・バクトリア王国がガンダーラ地方に勢力を広げた。また、インドの残留ギリシア人も仏教信者となっていた関係により、ガンダーラの仏教がギリシア文化の影響を受けていく。そのようなバクトリア地方も紀元前 2 世紀頃に西域地域に勢力を持っていた月氏が匈奴の南下により、バクトリア地方に移動。大月氏となって紀元前 145 年にグレコ・バクトリア王国を滅ぼす。また、グレコ・バクトリア王国の勢力範囲のスキタイ人（サカ人）も大月氏に追われてインドに侵入。その頃、そのような遊牧民族によって仏教は西域地域に。この頃になると、釈迦のお骨としての仏舎利も亡くなり、高僧の仏舎利にしたりしていた。

中国では、インドのマウリヤ朝の終焉と同時期に秦の始皇帝を倒した劉邦が漢帝国を建国。その後、紀元前 2 世紀後半には、第 7 代皇帝武帝が大月氏と手を結び、匈奴と戦い、西域まで領土を広げた。西域には仏教が広がっていたが、この段階では仏教の存在を認識してはいないが、仏教を広げる意識がなかった。本格的に仏教を取り入れたのは、後漢の第 2 代皇帝明帝で、倭国として初めて後漢と交渉した 57 年以降。大月氏一派のクシャーナ朝が誕生し、西域でインドの文化と中国の文化が結合。その結果、仏教が中国に入ってきて、明帝は 68 年に洛陽にて白馬寺を建立。そして、インドから伝わるサンスクリット語で書かれた数万巻もの経典を漢字に置き換えるために、経典を唱えあげることができる竺法蘭との経典の読経を漢字にできる迦葉摩騰をインドから迎えた。その後、2 僧は文殊菩薩の聖地として五台山を選び、住み着いた。北魏時代にこの五台山に大浮図寺が建立されている。第 11 代皇帝桓帝の時代、147 年にはアショーカ王が仏塔を建てたように洛陽から 100 km 以上離れた北に俱盧舎寺（現在の広勝寺）を建立。この時期に中国で初めて、仏舎利を埋めた仏塔が建てられたのですね。そして、148 年にクシャーナ朝の西にあるアルサケス朝（パルティア）から東南アジア経由で広州に入り、洛陽に来朝した安世高が 20 年にわたって、34 部 40 巻の経典を漢字に置き換えた。その後、月氏出身の支婁迦讖が第 12 代皇帝靈帝から第 14 代皇帝献帝の 20 年間で、洛陽で 14 部の大乘経を漢訳した。この頃の中国に仏教を伝える僧は、訳経僧

ばかりでした。迦葉摩騰や安世高や支婁迦讖の弟子が中国での仏教を広げていきます。その弟子達の中で、支婁迦讖の弟子に支亮がいて、学問を教えた子供の中に月氏出身の支謙がいた。



仏像においては桓帝の時代と同じ頃、クシャーナ朝のカニシカ王はガンダーラを中心に仏教美術の黄金時代を迎え、ギリシア文化を受け継いだ遊牧民は、マトゥラーやガンダーラの



仏陀直立像(ガンダーラの仏像)

地で仏像を製作するようになった。クシャーナ朝の時代、1世紀末のマトゥラーの四天王奉鉢やガンダーラの仏陀直立像のような仏像が出現し、クシャーナ朝の地域に石窟寺院が誕生した。その影響を受けて、中国でも仏像が製作されるようになってきた。後漢時代の最古の仏像は、2021年5月に陝西省咸陽市渭城区成任村の墓地から発見された釈迦牟尼立像で、長安や洛陽を中心にして、陝西省や山西



四天王奉鉢(マトゥラーのイーシャープルで出土)

省に急速に仏教の經典と仏像が浸透していった。そして、後漢末期には江蘇省や四川省まで。インドから東南アジアを經由して交州（今のベトナム）から広州を経て、安世高が洛陽に着たように、仏教も後漢に後の呉にも広がり始めていた。

後漢が 220 年に滅亡し、魏と呉と蜀に分裂し、三国時代にはいる。呉の孫権が 222 年に魏から独立して、建業（現在の南京市）を首都とした。そして、支婁迦讖の孫弟子である支謙を博士に任じた。その支謙によって仏教の存在を知っていた孫権は、中央アジアの康居出身の康僧会と出会う。この康僧会は、インドで仏教僧になり、呉が支配していた交趾郡（ベトナム北部）から建業にたどり着いた。そして、仏教の布教活動をし、孫権は康僧会のためにベトナムの Chùa Kiến Sơ（建初寺）を見本として 247 年に建初寺を建立し、經典の漢訳に当たらせた。建初寺には仏舍利塔と仏像を安置した金堂を中心とした伽藍仕立てになっていたが、蘇峻の乱（328 年）に焼失した。建初寺は、現在の南京市の大報恩寺となっている。康僧会独自で 247 年に建てた上海の静安寺もある。後に遣唐使として中国に渡った空海も静安寺に訪れている。また、康僧会の住まいとしていた場所に孫権の母親が 242 年に龍華寺を建立している。この頃、日本では魏の楽浪郡に邪馬台国の卑弥呼が使者を送っている時代で、魏から倭王と認められた時代。倭国の使者は、仏教に熱心だった呉の孫権と出会うこともなく、仏教を取り入れることは全くなかった。



三国時代の魏が呉と蜀を制圧して、魏の元帝から晋の武帝（司馬炎）へと政権が譲渡されて、晋（西晋）が中国を統一した。武帝は仏教を取り入れるため、インドから釈迦の仏舍利

を取り寄せ、282年に太白山の麓に仏塔を建てた。その後、インドのアショカ王にちなんでその地に阿育王寺を建立し、建初寺で修行した竺慧達を迎えて、その寺の舍利殿に仏舎利を納めた。日本では、邪馬台国の壹与女王が266年に晋の武帝に遣使、朝貢しているが、まだ仏教は伝来していない。その後、天平時代に日本に仏教を伝えた鑑真も渡航前に阿育王寺に立ち寄っている。鎌倉時代、後白河法皇に仕えた重源もこの寺を訪れている。阿育王寺は、長江デルタ地帯の浙江省寧波市鄞州区にあり、日本との運航には欠かせない土地だったよう



です。また、7,000年前の稲作文化として名高い河姆渡遺跡があり、日本の稲作文化の一部がこの地から流れてきた可能性がある。その阿育王寺の近くに、日本と関係深い天童寺もあり、鎌倉時代に道元がこの寺で修行した。日本の曹洞宗は天童寺を祖庭としている。阿育王寺のような仏舎利を崇める仏教は、この時代で終わり、座禅や仏像の前で経典を読み上げる時代に入った。そして、大乘仏教を伝える上で漢訳の経典の完成が望まれた。西晋の時代に現れた訳経僧、竺法護は月氏出身で敦煌菩薩と崇められ、266年から308年の間に、約150部300巻と称される古訳経典を完成させた。法華信仰および観音信仰を中国にもたらし、西晋の思想界に受け入れられた。この時代の他の寺院としては、西晋時代の300年に創建された南京市の鷄龍山にある鷄鳴寺では、南朝梁の時代に同泰寺と言われ、梁の初代皇帝武帝(蕭衍)がこの寺に533年に30万人僧を結集して『般若経』の講経を行った。そんな鷄鳴寺と天童寺は、日本の曹洞宗と繋がりが深く道元も修行したとされている。

西晋は、中国を統一したものの北からは匈奴の侵入があり、山西省に定住するようになった。一方、氐族や羌族もチベットから甘粛省に移住するようになり、彼らは当初、漢民族の

下で働いていたが、次第に力を蓄え、307 年に始まった永嘉の乱で異民族の反乱を起こした。八王の乱以降、北から匈奴が南下することで、西晋は南に押しやられ東晋となった。五胡十六国時代になる。この頃、中国が戦乱のさなかにあり、中国北部では国がめまぐるしく変わるので、日本からの使者を送ることはなかった。空白の四世紀と言われる時代です。そんな中国でも、従来のように仏教僧は訳経僧に限られていたが、西域から洛陽に現れた僧、仏図澄は訳経を行わず、後趙の明帝（石勒）に戦場の予言などをし、日常生活態度（戒律）を弟子に教え、仏教を広げるため多くの寺院を建立しようとした。



西晋が前趙の劉淵（山西省にいた南匈奴出身）に滅ぼされて、西晋の皇族であった司馬睿が健康で 317 年に東晋を建国した。その政権は、王導（山東省にいた琅邪王氏出身）の力を借りて成立した。琅邪王氏と言えば、応神天皇の時代（370 年頃）に百済から日本に渡ってきた王仁も王導と同じ一族で、王仁の祖先は西晋末期には、楽浪郡や帯方郡が高句麗に滅ぼされ、百済や東晋に移住した。日本に仏教が伝わったのは、百済と南朝との関係があった琅邪王氏と楽浪王氏の影響があったから。東晋の第 2 代皇帝である明帝は、健康付近に金山寺を 326 年に創建した。その明帝の子の成帝が即位した頃、インドの修行僧の慧理が東南アジア経由で杭州市にたどり着き、釈迦が『観無量寿経』や『法華経』を説いたインドの霊鷲山に見立てて、杭州西湖の西側にある武林山で座禅を組んで修行し、住み着いて靈隱寺の他 4 の寺院を建立した。その中で現在、靈隱寺だけが残り、禅宗の五山のひとつとなった。東晋王朝に仕えていた山東省西部出身の政治家の陸玩が、蘇州市の太湖東部沿岸に靈巖山寺を創

建している。また、前趙の時代に五台山でも禅宗の殊像寺が創建されている。



東晋時代中期になると、中国北部では前趙が後趙に滅ぼされ、さらに氏族の苻健が後趙を滅ぼして、351年に前秦を建国した。この時期、中国の北部は前秦が、南部は東晋が支配していた。朝鮮半島では、楽浪郡と帯方郡の崩壊で、郡司令部の人達は、現在の平壤からソウル辺りまで南下して、百済を建国した。東晋が建国した頃。当初は、百済と新羅が手を組み、高句麗と対峙する形を取っていた。邪馬台国を代表するように、倭国も楽浪郡との関係もあって、百済との関係を深めていった。近肖古王の時代に、高句麗に対抗するため、372年にはじめて東晋に朝貢して、国交樹立した。一方、倭国に対しても369年製作の七支刀、奈良県天理市の石上神宮に納めた鉄拳を送ってきている。百済としては、百済新羅同盟の他に、東晋＝百済＝倭国のラインを確立して、高句麗に対抗しようとした。また、近肖古王は倭国に馬や阿直岐と王仁を派遣して、『論語』『千字文』をもたらしした。高句麗の好太王碑文が示すように、倭国は海上から高句麗軍と戦った記録が残されている。

前秦が建国されて仏図澄の弟子である釈道安は、苻健の甥の苻堅（第3代皇帝大秦天王）の援助で政治顧問として長安に入り、經典の研究を進め、中国仏教の基礎を築いた。その他にも、禅宗や浄土教などを広げようとした仏図澄の弟子の中に竺僧朗がいて、苻堅の援助を受け、竺僧朗は351年に泰山の金輿谷（山東省済南市）に精舎を建て、仏教を広めた。後に520年頃に法定が靈巖寺を建立している。この弟子達により、仏図澄は実践的な中国仏教の原形を作ったと言える。そして、中国全土に896カ所寺院を建て、門信徒は1万人以上とな

った。この当時、仏教は外来宗教で、漢民族には浸透しなかったが、匈奴や氐族や羌族など



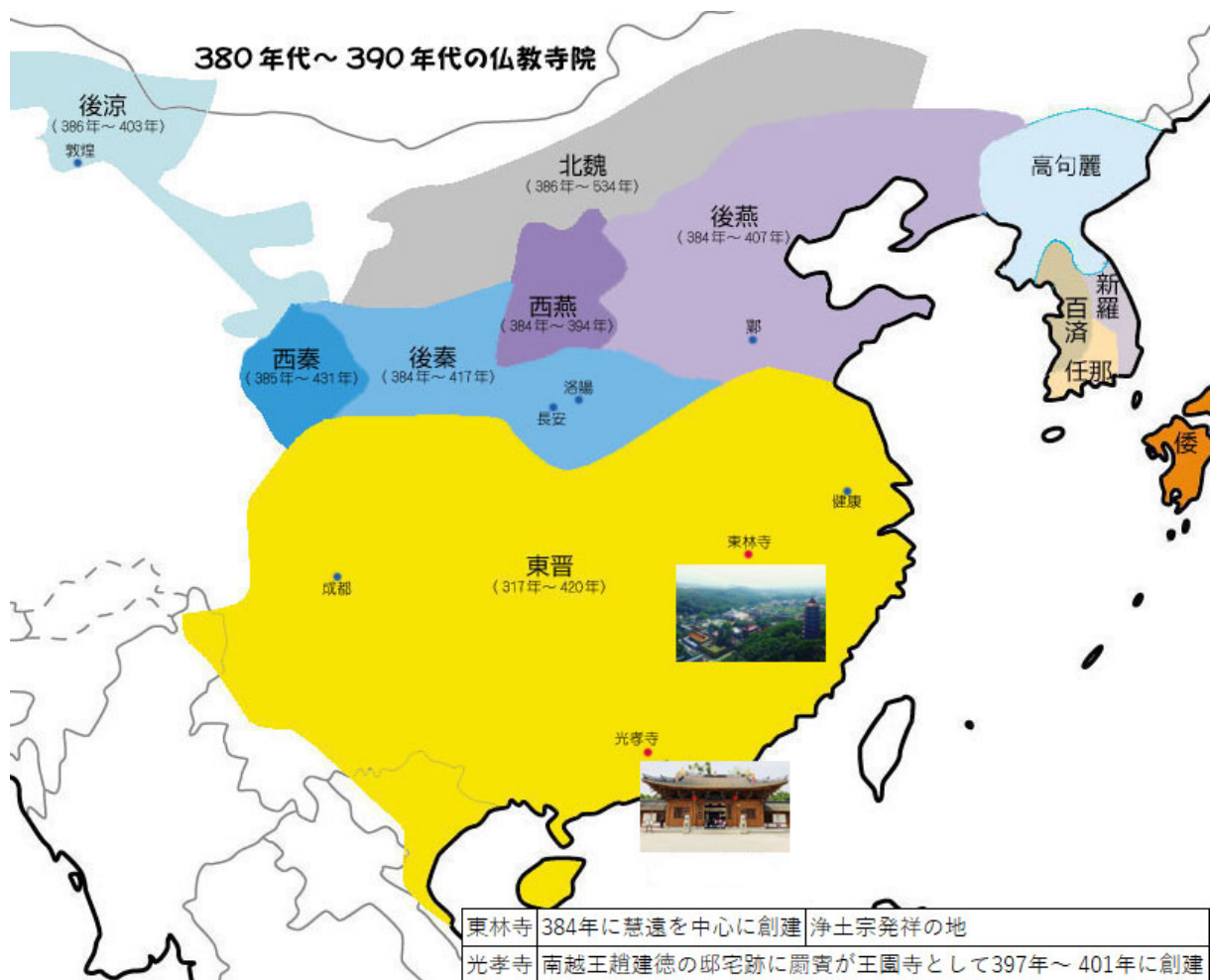
は仏教を取り入れていた。前秦の苻堅は、漢民族でも仏教徒になることを奨励した。仏図澄は、外来宗教であった仏教を中国での大衆仏教にした功労者であり、インド出身の道安は「竺」を名乗らず、釈迦の「釈」を取って釈道安と名乗ったので、出家して受戒の師に戒名を付ける習慣の最初の当事者であった。



東晋では、前秦が建国される頃に浙江省紹興市新昌県に、高僧の曇光が345年から356年にかけて、穩岳寺を建立している。後の大仏寺で、486年に僧護が見仙髻岩の崖壁に仏光が現れたのを見て、誓願してその岩壁に弥勒仏の大像を彫りはじめたのが、大仏寺の由来です。石仏と言えば、前秦の支配下にあった敦煌では、355年頃から楽僂が石窟に仏像を彫り始めた莫高窟がある。前秦は、東に勢力があった鮮卑族の前燕を攻めて制圧した370年代に中国北部を領土としたが、内部分裂により西秦と後秦に分かれ、鮮卑族



は後燕を建国し、北部にいたこれも鮮卑系の北魏が勢力を伸ばしてきた。その頃、日本では仲哀天皇と神功皇后の時代で、九州を本拠地とした倭国の旧勢力とヤマト王権との争い。そして、鉄器の需要で必要な鉄鉱石を求めての新羅との戦い。及び、百済との友好のための高句麗との戦いで、中国との交渉にまでには及ばなかった。中国北部は、五胡十六国時代なので戦乱が続き、中国南部の東晋だけが比較的安定していた。釈道安の弟子で慧遠は、師匠が前秦の苻堅によって長安に連れ去られた時、江西省九江市にある廬山で信者の援助を受けて、384年に東林寺を創建した。この寺はそれ以後、浄土宗発祥の地とされ、日本の浄土宗や浄土真宗からも師が居た場所とされている。また、慧遠は390年に中国でも初めてとなる仏教結社「白蓮社」を立ち上げた。



東晋は中国北部に対して比較的安定していたとは言え、皇帝の権威は薄れ、西晋時代からの官僚であった王氏や謝氏や桓氏が政治の実権を握り、特に「王馬天下を共治す」と言われ、王氏の権力は相当のものでした。そんな王氏との繋がりで、楽浪郡や帯方郡から百済に移住した百済の官僚としての王氏は、高句麗対策として東晋の援助を。東晋も北魏の包囲網として、百済や高句麗と手を結ぶ政策をしていたので、百済の近肖古王は、372年に初めて東晋に使者を送っている。そのような関係になった東晋と百済間で、東晋の博士高興により文字が伝えた。その経緯から、日本にも応神天皇の時代に近肖古王の孫、辰孫王（阿直岐）と学者の王仁（和邇吉師）が『論語』10巻と『千字文』1巻を伝えている。また、百済の仏教は近肖古王の孫、枕流王が即位して384年7月に東晋に朝貢し、東晋から384年9月にイ

インド出身の僧、摩羅難陀が送られて百済の仏教伝来の最初となる。この時期、仏教の伝来は百済止まりで日本に到達していませんね。しかし、日本から百済に習って、東晋の安帝に朝貢している。倭の五王の讃が 413 年に 1 度だけ。420 年には東晋が劉裕によって滅ぼされたので、倭の五王（讃、珍、済、興、武）は、劉裕の宋に 421 年から 478 年の間に 10 回朝貢している。それは南朝鮮での軍事権を認めてもらうため。「安東將軍倭国王」の称号が欲しかった。その当時の倭国は、第 18 代百済王、腆支王と倭人との婚姻関係を結び、南朝鮮の利権が欲しかったのでしょね。朝鮮半島東南部の金官伽耶（金海市）の鉄鉱石資源の利権を守るために。倭国は、親戚関係にあった百済を高句麗から守るために朝鮮半島に軍を派遣し、その正当性を認めて貰うため東晋と国交を願い出た。



そんな東晋の末期の仏教は、慧遠の弟、慧持が四川省の峨眉山に出向き、浄土教を広めるため万年寺を創建した。また、安徽省の九華山では、インドから渡ってきた僧、懷渡が 401 年に化城寺を創建している。中国北部では、まだ訳経僧が必要で、後秦の第 2 代皇帝、姚興は、前秦が亀茲国を攻略したときに捕虜となっていた鳩摩羅什を長安に迎え入れ、401 年に草堂寺を創建し、約 300 巻の仏典を漢訳させた。鳩摩羅什は、中国の最初の三蔵法師と言われている。

一方、中国北部では、鮮卑族拓跋部の創始者・拓跋力微の玄孫、拓跋珪（道武帝）が北魏を 398 年に建国し、後秦から独立した夏が滅びた後、拓跋珪の孫、拓跋焘（太武帝）が 439 年に北凉を滅ぼして、中国北部を統一し、五胡十六国時代時代が終わった。この拓跋珪は部

族民の合議制を廃止し、中央集権国家を目指した。そして、多民族統一の手段として仏教を取り入れ、前秦の苻堅に仕えた竺僧朗を仏教教団統括の官職、道人統（沙門統）に据えた。北魏の第3代太武帝（拓跋焘）は仏教を排除する政策を取ったが、第5代文成帝の時に仏教を復興させ、曇曜が460年に2代目の沙門統の官職に就いた。この曇曜は、雲崗（山西省大同市）に敦煌の莫高窟のように石窟に巨大な仏像を彫り始める。この雲崗石窟は、ガンダーラ美術の影響を受け、その後の石窟にはギリシア様式の唐草模様も見られるようになった。雲崗石窟の近くには、後漢時代の迦葉摩騰が聖地とした五台山があり、北魏の時代に佛光寺が創建されている。また、この五台山の近くで生まれた曇鸞は、『涅槃経』の仏性義を学び、『観無量寿経』を学んで『無量寿経』の注釈書を作成し、玄中寺を472年に創建し、末法の時代に他力の信心で浄土往生により成仏となると唱えて、浄土教の開祖となった。曇鸞の後、唐代の道綽、善導と続き、日本では平安時代後期の源信、鎌倉時代の法然、親鸞と続いた。

南朝宋時代の仏教僧では、禅宗を推し進めて行く上で、仏教の戒律などを否定し、その悟りの境地を肯定した考えを持つ風狂の僧、杯度と宝誌が現れた。仏図澄とは、違った神異的な行動をした。宝誌は、後に禅宗の寺院になる三祖寺に465年頃、庵を建て住み着いていた。そして、466年に宋王朝の都、健康（南京）郊外の鍾山（紫金山）に現れ、479年頃から神異の行いが見られるようになった。この宝誌の逸話は日本にも伝わり、『宇治拾遺物語』巻9に十一面観音に変身したという説話が残っている。宝誌が亡くなった時、南朝梁の武帝は宝誌の遺骨を納めるため、鍾山に開善寺（現在の靈谷寺）を建立した。





西住寺の宝誌和尚

479 年に宋から蕭道成の齊に政権が移行した頃、インドから東南アジア経由で中国にやって来た達磨は、北魏の第 6 代皇帝孝文帝が 495 年に創建した河南省鄭州市の嵩山少林寺で 9 年間、座禅を組んで禅宗を広めた。その結果、達磨は両足をなくしたと言う説話が広がり、日本で室町時代に起き上がり小法師の「だるま」が製作されるようになり、縁起物として重宝がられた。達磨が中国に着て、禅宗の開祖となった。日本では、鎌倉時代の栄西や道元によって、臨済宗と曹洞宗の禅宗が広められたが、中国では浄土教も禅宗もこの時代に開化した。



南朝では、齊の蕭道成と同族の蕭衍（武帝）が 502 年に梁を建国した。この蕭衍により南朝の民政を回復させ、政治改革を断行することで、治世が安定した。また、南朝では儒教が浸透している中、蕭衍は異常なほど仏教に傾倒し、多くの寺院建立に国民の税金を費やした。そして、549 年に死去して、梁は軍人の陳霸先と王僧弁の



対立により分裂していく。北朝でも、386 年から 534 年まで中国北部に君臨していた北魏だ

が、第 13 代皇帝、孝武帝の側近による跡継ぎ抗争がおき、高歡が実権を握る孝静帝の東魏と宇文泰が実権を握る文帝の西魏に分裂した。さらに東魏が齊に、西魏が周に変わる。そんな梁の武帝が創建した寺は、明教寺、靈谷寺、玉泉寺など。特に禅宗の寺院が多く、寒山寺やインド僧の智𪖇が創建した南華寺や高僧海印の庵があった南台寺、能仁寺。北魏の第 7 代宣武帝の妃が建てた永寧寺も。東魏でも唐代の臨濟義玄が臨濟宗を開宗した臨濟寺がある。これらの禅宗の寺院は、多かれ少なかれ達磨大師の影響を受けたと思われる。また、洛陽城内にあった永寧寺の伽藍は、厩戸皇子が 593 年に建立した四天王寺の祖型となっている。



この頃、日本では倭の五王の武が 502 年に蕭衍が梁建国にあたり、武帝に朝貢を送っている。朝鮮半島の軍事的支配を望んでいた倭国は、百済王との婚姻関係を持ち、倭人を王妃にし、生まれた王子を人質にし、その王子を次期百済王にする政策を南朝に朝貢することと共にやめた。その後、継体天皇の時代に大伴金村は、512 年に高句麗が百済の国土の北半分を奪われたことにより、倭国が占領していた任那の西部、上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁の四県を第 25 代武寧王が譲渡を要求してきたので、武寧王が永らくにほんで生活し、母親も倭人だったので認めた。また、神功皇后が新羅と戦って手に入れ、葛城氏が守り続けてきた任那の東部（鉄鉾石の産地）も、新羅の侵略にあい、略奪の危機にあった。新羅もヤマト王権と共に任那を統治していた九州の豪族に任那の統治を渡す作戦に出て、倭の分断を図った。そこで、任那に進軍していた近江毛野軍が、九州の豪族、筑紫君磐井軍と激突して、527 年に物部麿鹿火が出陣。磐井の乱です。その後、529 年に近江毛野を任那で新羅と領土交渉をお

こなつた。一方、百済では倭国と関係が深かつた武寧王が 524 年に死去し、第 26 代聖王が跡を継ぎ、高句麗の脅威から梁との朝貢を続けていた。この時期に、聖王は梁から「五経博士」の派遣や「詩経」や仏教に関わる職人や絵師などの派遣を依頼している。541 年に聖王は、欽明天皇に対して「任那復興会議」を提唱して、百済主導で伽耶諸国との連合を提案し、新羅に対して援軍を要請します。その見返りに欽明天皇は、金銅の仏像一体、幡、經典などを伝えた。これが、よく言われる「仏教公伝」です。

日本史上、仏教の伝来はこの仏教公伝とされていますが、これはその当時のヤマト王権と百済の国家的な出来事で、実際にはそれよりちょっと前に仏教は日本に伝えられていた。仏教公伝では、南朝の梁と百済と倭との関係が強調されているが、北魏の最後の皇帝、孝武帝の子で善正という僧侶が、北魏崩壊した 534 年の前に、531 年に九州の英彦山に祠を建て、渡来した時に持ってきた仏像を祀った。この話は、『鎮西彦山縁起』の逸話として掲載されている。この祠が現在の英彦山霊泉寺です。少し、信用性が薄いかも知れないが、百済に仏教が伝来したのは、第 15 代目の枕流王の時代で、384 年に百済が東晋に朝貢を送ったとき、東晋から、西域出身の摩羅難陀という僧を紹介されて百済に連れて帰った。そして、漢山に 385 年に創建したと『三国史記』に記されている。これが事実だとすると、任那に従事していた、或いは百済と交渉していた倭人は、その頃から仏教を認識していたことになる。

欽明天皇の時代に仏教が伝来したとはいえ、ヤマト王権の内部ではすでに仏教を認識していたと思われる。たとえば、『日本霊異記』に記載されている話で、敏達天皇の時代に和泉の海中から楽器のような音や雷が鳴り響く音が聞こえるという噂が流れた。そして、昼は鳴り、夜は輝く。この噂を聞いたヤマト王権に仕えていた紀伊の犬養連の屋栖古が敏達天皇の皇后、額田部皇女（後の推古天皇）に話したところ、額田部皇女が屋栖古に調べてくるように命じた。そこで、屋栖古は高脚の浜（現在の高石市）に行き、音や光を放す、落雷に撃たれた楠を発見した。その楠を持ち帰り、額田部皇女にこの楠で仏像を造りたいと許可を得て、屋栖古は蘇我馬子に相談し、継体天皇の時代、522 年に渡来した仏師、司馬達等と帰化系の東漢氏の一族で池辺氏の氷田に命じて、その楠で 3 体の菩薩像を造らせた。これが吉野の比蘇寺の阿弥陀像だと言われている。その他にも、『日本書紀』には、敏達天皇の時代、584 年には百済から鹿深臣と佐伯連が持ち帰った仏像 2 体を蘇我馬子が司馬達等と氷田に命じて、修行僧を探させ、播磨国にいた高句麗人の恵便によって祀られた。この逸話からも分かるように、継体天皇の時代に任那から帰化人を大量に引き受けた経緯があり、その中に東晋や百済の僧、もしかすると、北魏や高句麗の僧も混じっていたのではないだろうか。高句麗に渡った僧としては、前秦の符堅が 372 年と 374 年に高句麗に派遣した順道や阿道がいる。また、司馬達等や氷田という仏師によって製作された仏像が、仏教に否定的な敏達天皇やその側近の物部尾輿や中臣鎌子が排仏派になり、蘇我稲目が崇仏はとなり、推古天皇の時代の物部守屋と蘇我馬子の対立まで尾を引いた。

仏教公伝が行われた欽明天皇の時代に、北魏は西魏と東魏に分裂し、550 年に東魏が北斉に、556 年に西魏が北周に。南朝の梁も 557 年に陳に政権が変わった。そして、北周は 577 年に北斉を滅ぼし、581 年に隋に政権交代があり、隋は南朝の陳を 589 年に滅ぼして、中国を統一した。敏達天皇の時代に、排仏派と崇仏派に分かれて、仏教の是非を争っていた日本と違って、随が中国の統一に進んでいたころですね。日本では、最澄が 804 年に遣唐使とし



て唐に渡り、天台山へ。そして、天台山で天台法華と天台密教を習得した。この天台宗を中国で開いたのが智顗で、天台大師と言われた。北齊の慧文が天台宗の初祖で、智顗の師匠が慧文の弟子で、567年に湖南省衡陽市にある福嚴寺を創建した慧思。その弟子の智顗は、568年から575年まで金陵瓦官寺で『法華経』や『大智度論』を講義し、浙江省台州市にある天台山の高明寺を575年に創建し、中国の天台教学を大成し、天台宗を開いた。

漢民族の西晋が異民族（鮮卑、氐族、羌族）の南下により、領土の半分を占領され、中国の北半分が異民族、南半分が漢民族となって、五胡十六国時代と南北朝時代を経過して、鮮卑族の隋が中国を統一するまでおよそ200年弱かった。そして、ヤマト王権は隋の建国により、推古天皇の時代、600年から618年まで、技術や制度を学ぶため、遣隋使を派遣するようになった。中国への朝貢は、倭の五王以来ほぼ2世紀ぶりのことでした。